

ユングとスウェーデンボルグ

大 賀 睦 夫

はじめに

I スウェーデンボルグの聖言解釈

II ユングの錬金術解釈

III 錬金術の象徴構造

IV ユングとスウェーデンボルグの共通点

むすび

はじめに

ユングは一般には心理学者とみなされているが、彼の業績は心理学に限定されるほど狭いものではない。彼は幅広い教養をもった思想家であった¹。同様にスウェーデンボルグは宗教思想家、神秘家などと紹介されているが、それらのことばのもつニュアンスとはまったく異なる人生を送った人物であった。彼の本質はむしろ霊的科学者（spiritual scientist）であったと言うべきではないかと筆者は考えている²。そして両者はいろいろな意味でよく似ているのである。ユングは若いときにスウェーデンボルグの熱心な読者であったので、スウェーデンボルグの影響を受けたと言ってもよいであろう。ユングの思想が科学（学問）を基礎にしているのと同じように、スウェーデンボルグの思想も科学を基礎にしていると言える。もちろんユングとスウェーデンボルグでは時代がちがうので論じ方はずいぶん異なる。ユングは宗教に深い関心もった人であるが、彼が宗教の問題を論じる場合には科学の枠を超えないように細心の注意を払っている。たとえば彼は心は本来的に宗教的機能をもっていると言うが、一方で「心理学がたとい単なる仮説的原因としてでも神を措定するようなことがあれば、神の何らかの存在証明の可能性を暗に主張したことになり、それによって心理学は自己の権限を踏み越えることになるであろうが、これは絶対に許されない。科学は科学以上のものではありえない。」³と述べている。

これに対しスウェーデンボルグの場合は神を認めることが前提で、議論は信仰と科学が一体となったかたちで展開する。その意味ではバッハと同様に彼は古い時代の（バロック

の) 人だったのである⁴⁾。しかし両者はものごとをシンボリックにとらえる方法においてよく似ている。そしてそのような方法によって見出されたスウェーデンボルグの聖言の内的意味とユングの錬金術の心理的意味もよく似ている。聖書も錬金術も今日的な言い方をすると「自己変容」を扱っているという結論になる。そしてその発見が彼らの思想の中心概念となるという構造になっている。ユングもスウェーデンボルグも実に幅広いテーマを論じているし、今述べたような重要な立場の違いもあるが、「自己変容」が両者の思想の中心テーマの一つであったと理解することは許されるであろう。「ユングとスウェーデンボルグ」というタイトルではあるが、本稿で扱うのはこの狭いテーマに限定される。以下、このテーマに焦点を合わせつつ、ユングとスウェーデンボルグの思想が科学を基礎にしているということ、類似性はそこからくること、そして両者の思想の現代的な意味もその科学性にあるのではないかということを論じてみたい。

I スウェーデンボルグの聖言解釈

1 相応とは何か

スウェーデンボルグの影響でもっともよく知られているのは文学への影響である。スウェーデンボルグはボードレールをはじめ象徴主義の詩人たちに影響を与えた⁵⁾。とりわけ彼らを引きつけたのはスウェーデンボルグの「相応 *correspondentia*」という概念であった。象徴主義の詩人たちは、具体物を象徴として超自然的な宇宙の秘密を感知し認識するという考えが、より明確なかたちでスウェーデンボルグの相応の概念の中で展開されていることを見いだしたのである。ボードレールはスウェーデンボルグの著作に触発され、「相応」という詩さえ書いている。ただしボードレールの『悪の華』とスウェーデンボルグの著作の世界はずいぶん異なるということも付言しておくべきであろう。象徴主義のデカダンな雰囲気とは対照的に、スウェーデンボルグの世界はきわめて健全、崇高である。その意味ではスウェーデンボルグの象徴主義への影響は限定的であった。

さて、そのようなかたちで知られている「相応」が、いかにしてスウェーデンボルグの聖言解釈の方法となったのか見ていくことにしよう。相応について、彼は次のように述べている。「相応とは何か、流入とは何かを実例で説明しよう。顔つきと呼ばれる顔の変化は心の情愛に相応する。したがって心の情愛の状態が変化するのと同じように、顔つきは

変化する。これらの顔の変化は相応である。したがって顔そのものも相応である。そして相応が現れるように顔に作用する心の働きが流入と呼ばれる。人間の思考の視覚は知性と呼ばれるが、それは目の視覚に相応する。したがってまた、目の輝きと色合いから、知性からくる思考の質がわかる。目の視覚は相応である。したがって目そのものが相応である。相応が現れるように目に働きかける知性の作用が流入である」⁶。

もう少しわかりやすく言いかえてみよう。精神世界があり物質世界がある。心は精神世界に属し、顔は物質世界に属する。そしてたとえば次のような例を考えてみる。心が喜ぶと顔には喜びの表情が現れる。心が悲しむと顔には悲しみの表情が現れる。あまりにも当然のことなのでわれわれはここに何の疑問も抱かないが、精神世界と物質世界がどのようにリンクしているのかと考えてみるとこれは実に不思議なことである。つまり精神世界と物質世界とはつねに相応して動いているということに気づく。スウェーデンボルグが言った相応とはそういうことである。彼によると相応があるのは心から肉体への流入があるからである。このようにして存在の異なるレベルは相応によって結びついているという。

別の例を挙げてみよう。「聞く耳がある」とはよく従うという意味である。耳と服従は相応しているためにこのような表現が可能になる。「見える」はわかるという意味である。目と知性は相応している。同様に鼻と認識、心臓と愛、肺と信仰、などなど。ここにも相応がある。ライオンは怒り、キツネは狡猾、子羊は無垢を表す。これも相応である。ここまでなら相応は詩人の想像力を刺激する一つのものの見方ということになるかもしれない。エマソンもまたスウェーデンボルグの相応の考え方に刺激を受けて『自然』を書いた。相応によって自然界を見るということは、そこにシンボリックな意味を見出すということである。エマソンの、自然界は道徳的意味にあふれているという主張も相応から出てくる⁷。

しかしスウェーデンボルグの相応の理解はそのようなレベルにとどまるものではない。彼の議論のユニークさは、存在の異なるレベルを結びつける相応を論理的推論によって一般化するところにある。創造にはいくつかのレベルがあり、それらのレベルは相応によって結びついている。物質世界は創造の最下位のレベルである。最下位のレベルはその上位にあるレベルとの相応によって存在する。そしてその上位のレベルはさらに上位のレベルとの相応によって存在する。これを繰り返していくと、相応はついには創造主にいたるであろう。万物は結局神との相応によって存在すると考えられる。言いかえると世界のあらゆるものを一者に結びつけるものこそ相応ということになる。こうして相応はスウェーデンボルグにとって根本的に重要な概念になるのである。

2 相応による聖言解釈

スウェーデンボルグの相応は神学的著作で初めて展開されたわけではなかった。すでに科学的著作の中で出てくる考え方である⁸⁾。したがって相応の考え方は直接には彼の霊的体験とは関係がない。むしろ相応の考え方が彼をユニークな霊的体験へ導いたというのが事実であったと言えよう。1744年から45年にかけてスウェーデンボルグが科学者から神学者へと変わっていくときの日記が残っている。夢とその分析が中心なので『夢日記』と呼ばれている。そこでスウェーデンボルグが夢を重要なものと考え、その意味を探っているのは驚くべきことである。なぜなら古代人にとっては夢は意味のあるものであったが、近代人においては夢は単なる幻想にすぎないものだったからである。夢の意味は1900年に公刊されたフロイトの『夢判断』によって、心の深層を表すものとして再発見されたとされている。しかしそれより150年以上も前に、スウェーデンボルグは夢を深層の現れとして分析している。これも相応の考えによるわけである。心の深層の感情は相応によって夢の中で何らかのイメージのかたちをとって現れる。スウェーデンボルグの神秘体験は、彼が夢の分析をとおして心の深層を探究した時期に始まっている。そして彼は深層からさらに深い世界に入り込んだのだった。そしてその体験は彼のユニークな聖書解釈（正確に言うとは聖言解釈）⁹⁾につながっていく。

スウェーデンボルグは聖言は相応によって書かれているということを発見した。旧約聖書に含まれる古い文書は相応によって書かれているので文字の意味とは別の内的な意味が存在するというのである。また古い宗教儀式にも相応する意味があったという。しかし彼によると現代人には相応の知識は失われ、その意味はわからなくなっている。したがってスウェーデンボルグの聖言解釈は相応によって古代人が理解した意味を再発見する試みとなるのである。

聖言の内的意味を逐語的に明らかにした『天界の秘義』は全8巻、総計約6200ページの大著である。この大著によって明らかにされた聖言の内的意味とは何か。スウェーデンボルグの説明を要約すると、聖言は主として次の三つのテーマを扱っていると言えよう。第一に栄化の過程。これはイエスが自らの人間性を神的なものに変化させる過程である。第二は太古から現在に至るまでの教会についての歴史。第三は人間の精神的成長（スウェーデンボルグの用語では再生 *regeneratio*）の過程の諸問題。すなわち聖言は以上の三つ、神と教会と人間について語っているということになる。栄化の過程はまさにまばゆいばかりに神々しい世界であるが、私たちと無関係の世界ではない。スウェーデンボルグが言う

ように「人間の再生は主の栄化によく似ている」¹⁰のであり、私たちはそれを模範とすることができるのである。また教会の歴史とは人間の精神的状態の歴史であり、教会の墮落、試練、再生は私たち一人ひとりの精神的成長の問題としてとらえることもできる。このように考えると、聖言が扱っているのは神と教会と人間の三つのテーマであるとしても、つまるところすべては人間の精神的成長の問題にかかわってくると言えるのである。スウェーデンボルグにとって神は人間の外部にあって遠くから礼拝するような対象ではない。神は常に人間の内部で働いているのである。スウェーデンボルグにとって教会とは人間がこの世で所属する組織をさすのではない。教会に属するとは人間が善と真理の状態にあるということを意味する。したがって神、教会について語ることは私たちの内面について語ることでもある。

3 聖言の内的意味

聖言の内的意味をスウェーデンボルグの著作でさらに具体的に見てみよう。最初に取り上げるにふさわしいものは、天地創造の物語である。彼によると、天地創造の7日間は人間の精神的成長の過程すなわち再生の7段階を表している。聖書の第一ページに聖書全体に通じるテーマが現れているということになる。

物語の内容とその内的意味を整理してみよう（表1参照）。表の左側に文字の意味、右側に内的意味を掲げているので参照していただきたい。第一日、つまり第一の状態は「闇」である。これは混沌とした精神状態を意味する。第二の状態は「光と闇の分離」、すなわち真理と誤謬、善と悪の判断ができる状態である。第三は「地に柔らかい草、実のなる木」がはえる状態、すなわち人間に善が生まれる状態である。ただしそれは活動的な動物ではなく動きのない「植物」によって表されている。これはこの善が試練の結果生まれたもので生きたものではないということを表す。第四の状態は「太陽と月」の創造、すなわち愛（太陽）に動かされ信仰（月）によって明るくされて善を行うという状態である。第五は「海の魚」と「天の鳥」が生まれる、すなわち生きた知識生きた合理性をもつ状態である。第六日には「ほ乳類」が生まれる。ほ乳類は情愛を表す。すなわち意志に属する愛から善を行うとき、その善は生きているということである。神が人間を「神のかたちと似姿に」つくったことは、霊的人間の信仰と愛を意味する。「男と女」につくったことは、知性と意志とが結合するということであり、「うめよふえよ」はあらゆる善と真理が生まれるということである。なおこの段階で「地を治めよ」と言われているのは、なお人間

(地)に戦いがあるということであり天的な状態には至っていないということである。第七の状態は「神が休まれた」、すなわち戦いは終わって天的状態になったということである。人間の再生の過程でありながら「神が休まれた」と言われているのは、再生の過程で戦うのは人間ではなく神であるという意味である。

表1：スウェーデンボルグによる聖書の内的意味
(創世記第一章から)

1 闇	混沌
2 光と闇を分ける	真理と誤謬・善と悪の判断
3 地に柔らかい草、実のなる木	人間に善が生まれる ただしこの善は生きていない (植物) 試練の結果生まれたもの
4 太陽と月	愛に動かされ 信仰により明るくされる
5 海の魚 天の鳥	生きた知識 生きた合理的なもの (魚・鳥)
6 ほ乳類	情愛、意志に属するもの 生きた善
神のかたちと似姿に	霊的人間の信仰と愛
男と女に (結婚)	知性と意志 (結合)
生めよ、ふえよ	あらゆる善と真理
地を治めよ	闘いがある
7 神は休まれた	天的な人 闘いは終わる (再生は神の働き)

以上が天地創造の7日間の物語の内的な意味である。すなわちそれは人間精神の成長過程を描いている、とスウェーデンボルグは言う。もちろん人間がすべて天的になるというわけではない。彼は「今日大部分の者は第一の状態に達するにすぎない。ある者は第二の状態にのみ達する。第三、第四、第五の状態に達する者もあるが、第六の状態に達する者はほとんどいない。第七の状態に達する者はまずいない。」と厳しい見方をしている。しかし人間は試練をとおしてより低い状態からより高い状態へと成長していく存在である、そのように神の力が働くものだということが述べられているというのである。

天地創造に続く物語はアダムとイブの楽園の物語やノアの物語である。ここで扱われているのは教会の歴史であるとスウェーデンボルグはいう。アダムとは最古代教会のことであり、彼が楽園にいたとは彼らが天的な状態にあったことを意味する。失楽園は最古代教会の墮落である。墮落した人類は主によって新しい教会がつくられることによって救われる。それがノアの物語の意味である。ノアとは古代教会を意味する。古代教会は霊的教会であり、最古代教会が天的であったことと比較すると精神的にはより低いレベルの教会であった。このようにアダムやノアの物語では人間の精神状態の歴史が扱われているという。興味深いことにスウェーデンボルグによると人間の精神状態は太古が黄金時代であって時代が下るにしたがってレベルが低くなっているという。最古代教会が墮落したので古代教会がつくられ、それが墮落したのでユダヤ教会がつくられ、さらにそれが墮落したのでキリスト教会がつくられたという。

さて、アブラハムの物語からイエスの内面の成長過程が扱われるという。イエスも人間と同じように低い状態から高い状態に進まれたというのである。詳しく紹介する余裕はないので、一例としてイサクの誕生とイシマエルの追放の話のみを取り上げておこう。アブラハムと妻サラとのあいだにはなかなか子供ができないが、ようやく100歳のときにイサクが生まれる。その内的な意味はこうである。アブラハムが意味するものはイエスであり、イエスの神的善である。神的善を表すアブラハムは神的真理を表すサラと結合して神的合理性たるイサクが生まれる。100歳の意味は完全であるということである。ただしイサクが生まれる前にエジプトの女ハガルとの間にイシマエルが生まれ、彼らを追放しなければならなかったというエピソードがある。エジプトの意味は記憶知、女は情愛を表す。つまり記憶知への情愛から生まれた最初の合理性（イシマエル）はイエスにとっては捨てなければならないものだったということである。アブラハムがハガルとイシマエル母子を荒野に追放するのは残酷な話であるが、その内的意味は以上のようなことであるという。この

ように旧約聖書の物語では登場人物がうそをついたり、忌まわしい行為をしたり、残酷であったりするが、スウェーデンボルグは相応による解釈によってそれらに聖書にふさわしい合理的な意味を与えているのである。内的意味の説明は延々と続くが、このあたりで切り上げて相応による聖言解釈のまとめをしておこう。

要するにスウェーデンボルグが何千ページを費やして説明していることは、聖言は相応のことばによって書かれているということ、そしてそれが扱っている中心テーマは人間の再生の問題、精神の成長の問題であったということである。

Ⅱ ユングの錬金術解釈

1 意識と無意識

本稿の課題はユングとスウェーデンボルグの思想の比較であった。そこで次にユングに目を転じてみたい。ユングの錬金術解釈と密接な関係にあるのが彼の「個性化」概念であり、ここではそれを主として取り上げたいのであるが、その説明のためにはまずユングの心の見方から始めなくてはならない。

心には主体性がある。すなわち意志と判断力がある。そのような主体性は意識の中にあるから心とは意識のことであると多くの人々は考える。しかしユングはそのような考えは近代人の思い上がりであり、心と意識は決して同じものではないと言う。意識は心の一部にすぎない。心は意識と無意識とからなっている。もし意識＝心であれば心の問題はまことに単純であろう。しかしそうではなく無意識もまたある種の主体性をもっているというのが事実なのである。無意識の存在を認めると一転して心は複雑で理解しがたく神秘に満ちたものとなる。

心は意識と無意識からなるが、両者の関係は単純ではない。ユングによると通常両者は対立する関係にある。内向対外向、思考対感情というように意識と無意識のかまえや機能が正反対になっている。これは本来その人にあるものが意識によって否定されると、そのような部分が無意識の領域に追いやられるために起こるのである。否定されたからといって、それがその人からなくなっているわけではない。見方を変えたと、否定することは意識が一面的になるということであるが、否定されたものは無意識の領域に存在することで心全体としてはバランスが保たれる。ユングはこれが無意識の補償作用と呼んだ。無意識

にそのような作用があることを理解し、無意識のメッセージを意識化して心の中の複数の主体間により関係をつくっておくことが、人格の統一性を保持する上では望ましいとユングは考える。無意識の領域をないがしろにしておくところには荒れ果て、醜いあるいは病的なかたちで現れるであろう¹¹。

2 個性化と錬金術

このように意識と無意識の統合が望ましいのであるが、実はそれは容易なことではない。無意識の中身は本人の意識によって否定されたものだからである。意識とは正反対なものを性急に意識の中に取り込むことは困難である。無意識には有益なガイドシステムがあるというのがユングの発見であるが、無意識とつきあうのはなかなか難しいというのが実際のところである。その困難なプロセス、無意識の内容を意識化して統合していく過程がユングの言うところの「個性化」過程である。

ユングは次のように述べている。「私は個性化という表現を、心理的な個体・すなわち他から分離した分割しえない単位・一つの全体・を作り出す過程という意味で使っている」¹²。つまり意識は心理的な個体の全体に当たるとは言えないというのである。「心は異なった二つの部分から成っていて、それが一緒になって全体を形成しなければならない」¹³。さらに個性化の過程の困難さについて次のように述べている。「意識と無意識は、一方が他方を抑圧したり傷つけたりすると、全体とはならない。両者がたとえ戦わざるをえないとしても、その戦いは正々堂々たる対等の戦いとなるのが望ましい。どちらも生の一面である。意識は自らの理性と自己防衛の可能性を守るべきであり、無意識の混沌とした生もまた、われわれがそれに耐えられるかぎり、自己流のやり方に従う可能性をもつべきである。これは開かれた戦いと開かれた協力が一つになるということを意味している。人間の生はこのようであってはならない。これは昔から言われている、金槌と金床の関係である。両者のあいだで苦しむ鉄は、鍛えられて、壊れない全体に、つまり『個体』になる」¹⁴。個性化過程とは「心の二つの基本要素の葛藤から生まれる一つの過程ないし発達経過」¹⁵なのである。

さてそのような「個性化」が錬金術といったいどんな関係があるというのだろうか。錬金術とは卑金属を金に変えようと試みる古代、中世の原始的化学技術のことである。近代科学によれば、そもそも錬金術師は間違った前提から不可能なことをやろうとしていたのであってばかっているということになるであろう。ユングも当初はそう思っていた。しか

し1928年に中国文化の研究家リヒャルト・ヴィルヘルム訳の中国の錬金術書『黄金の華の秘密』を読んで、彼は錬金術師がシンボルを使って話していることに気づく。錬金術は実は単なる物質的な金をつくることをめざしていたわけではなかった。むしろそれは人間の内面の問題、すなわち対立物の結合という個性化過程を象徴的に表したものであったということをユングは発見するのである。錬金術は化学的研究としては無価値かもしれないが、心理学的にはきわめて貴重な文書であることがわかったのである。ユングは錬金術の真価を見出したのであった。

3 元型

もしそのように錬金術を解釈することができるとすれば、それは大発見にまちがいないが、はたしてシンボルによって何かを語るということが可能なかどうかという疑問が出てくるかもしれない。ユングはそのような疑問に答えて「元型」という仮説を提示している。シンボルによって語りうるのは、人間の無意識の心のはたらきに人類共通のパターンがあるからである。心の共通のパターンである元型に相応して元型的イメージが現れる。元型の証明は複雑であるとユング自身考えているが、ここでは彼の基本的な考え方のみを紹介しておこう。元型への考察へと彼を導いたのは次のような経験がきっかけであった。

1906年頃ユングはパラノイア性分裂病患者の珍しい空想に出会った。太陽を見ながら「太陽のペニスが見えるでしょうが。私が頭を左右に動かすと、それも同じように動くんだよ。そしてそれが風の原因なんです。」¹⁶とその患者はユングに言った。彼には理解できなかったがそれをノートに書き留めておいた。そして4年後にユングは古代のミトラ教の儀典書の中に同様の記述があることを知ったというのである。それには「汝、日輪より垂れ下れる筒を見るならん。これ西の方角を向けばたちまち東風起こりて止むことなく、東の方角を向きて命ずれば西風となる。」¹⁷とあった。同一のビジョンが2千年の時を隔てて別々に生じるということは、人類に共通のイメージがあるということではないかと彼は考えた。これがごく単純化した元型の基本的な考え方である。錬金術のシンボリックな解釈はそのような考え方に根拠を置いている。

このように、ユングにとって錬金術は個性化過程を表すものであった。それは化学としては無価値かもしれないが、心理学的には貴重なものなのである。それでは個々の錬金作業はいかなる個性化の過程を示しているのであろうか。次にそれを具体的に見ていくことにしよう。

Ⅲ 錬金術の象徴構造

1 錬金の作業

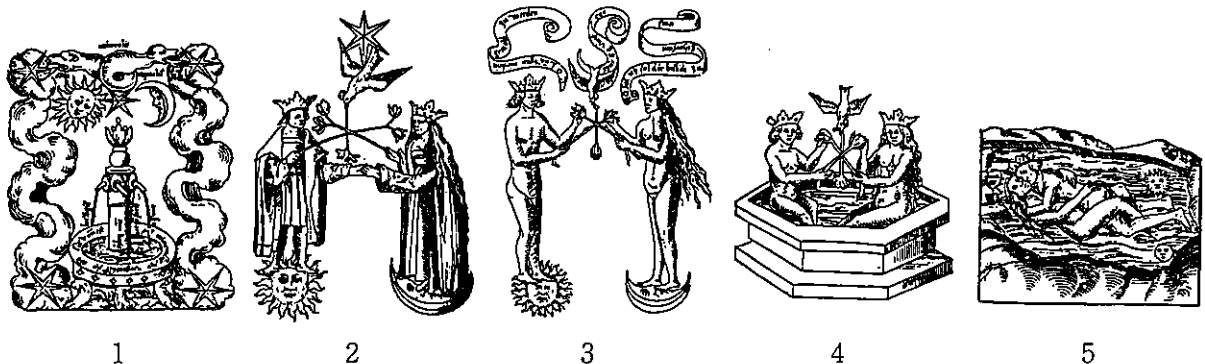
ユング『転移の心理学』の中に「『哲学者の薔薇園』」の一連の挿し絵を材料にして転移現象を論じる試み」というのがある。タイトルにあるとおり錬金術の一連の図版を解説したものであるが、訳者の林氏が述べるように、これは転移現象というよりむしろ個性化過程を描いたものと言える¹⁸。そこでこれを取り上げたいのであるが、それには次のような問題もある。『哲学者の薔薇園』の10枚の絵にユングがつけている解説はまことに興味深いが、残念ながら彼の解説はかなり抽象的で、より詳細で具体的な個性化過程のモデルを期待する読者には不満が残る。また『哲学者の薔薇園』の絵は20枚あるのに、ここでユングが取り上げているのはその半分にすぎない。説明は半ばで終わっているのである。そこで錬金術は個性化過程を表すというユングの考え方に基づいて『哲学者の薔薇園』の図版にいっそう詳細な解説をつけているヨハンネス・ファブリキウスの著作『錬金術の世界』をユングの錬金術解釈の発展型と見なし、これに依拠することにしたい¹⁹。以下の錬金の作業を示す一連の図版はファブリキウスの著作からとったものであるが、もともと1550年に出版された『哲学者の薔薇園』に含まれているものである²⁰。まずそれぞれの図版の説明を要約して紹介しておこう。

- 1 第一資料。作業の劇的な開始。メルクリウスの噴水があふれている。
- 2 太陽の王と月の女王の出会い。
- 3 裸の真実。
- 4 メルクリウスの泉に漬かる。
- 5 第一の結合。
- 6 王と女王の腐敗する死体。
- 7 魂の抽出。
- 8 天の露が不純な体を洗う。
- 9 魂がホムンクルスとして天より戻る。
- 10 第二の結合。「白」の再誕。有翼の両性具有者が月に生まれる。
- 11 高貴な性交。
- 12 有翼の王が石棺に沈む。

- 13 ハート形の愛の翼の中で息をひきとる両性具有者。
- 14 月の生が完全に終わり、霊が天に昇る。
- 15 天の露が腐敗する両性具有者の体を洗う。
- 16 魂と霊が成熟した女として天より戻る。
- 17 第三の結合。「天上の結婚」。太陽の丘の上に立つ両性具有者。
- 18 「緑と金のライオン」が太陽と月を食う。
- 19 聖母マリアの被昇天と「天」における戴冠。
- 20 復活の朝にキリストが墓から復活する。

以上を文字どおりに理解しようとしても理解困難である。そこで次にファブリキウスによるその深層心理学的解釈を見てみよう。

2 作業の開始から第一の結合に至る段階（図1～5）



ファブリキウスは『哲学者の薔薇園』の最初の五つの図版を一つのまとまりとしている。これは作業の始まりから地上での再誕が起きるまでの過程である。彼の解釈によると、メルクリウスの噴水からあふれる水は、退行する無意識の意識への侵入を象徴する（図1）²¹。その開始される作業の「第一質料」から王と女王があらわれることは、退行による思春期（個人の最後の形成期）の復活を意味する（図2）。全裸になった王と女王は幼児期の赤裸々なエディプス的葛藤の再現である（図3）。王と女王の分離が、女王の井戸の共生の水への王の降下によって果たされる（図4）。「生命の水」での両性具有的結合は子宮期リビドー体制への到達を表す（図5）。一連の図は、思春期、潜伏期、子供時代、幼児期、誕生時の葛藤を復活して解消する過程を表す。要するに、これらは「成人期の土台をなす無意識の成熟過程を象徴しているのである」²²。そのような意味において、最初の結合が意味することは、ついに成人に達したということである。

3 ニグレド (図6・7)

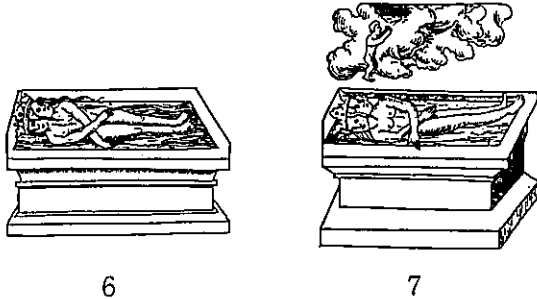
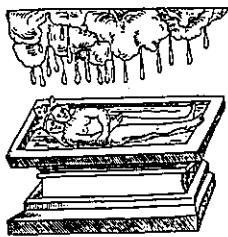


図6・7が表しているものはニグレド（黒色化）である。錬金術の作業の頂点で結合の栄光が突如として消え失せ、闇と絶望がもたらされる。これは作業の新しい段階の始まりであり、錬金術師たちはニグレド（黒色化）、テネプロシタス（闇）、モルティフィカティオ（死）と呼んだ。個性化の観点から解釈すると、ニグレドは中年に起こる深遠な鬱状態の発作を象徴するとファブリキウスは言う。「統計によれば、中年に鬱状態におちいる頻度は高い。成人の心理を強調する無意識の結合のあと、30歳から40歳にかけて、不思議な変化が無意識に生じるようだ。ユングは人生のこの段階を人生の曲がり角と呼んだが、これは人生の後半のはじまり、あるいは結果が広範囲におよぶ心理的变化のはじまりを意味する」²³。ファブリキウスは以上のように述べ、次のユングのことは紹介している²⁴。「中年以降、生きながら死ぬ準備のできている者だけが真に生き続ける。人生の真昼の秘密の刻限に、放物線が逆転して死が生まれるからである。人生の後半が意味するのは、上昇や展開や増加や繁栄ではなく、死にほかならない」。

4 アルベド (図8)

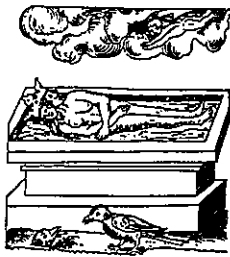


8

ニグレドに続く段階は煨焼あるいは洗浄による「清め」である（図8）。これがアルベド（白色化）と呼ばれる。ファブリキウスによるこのシンボリズムの解釈は次のとおりである。「鬱状態において自殺が回避されると、たいていの者は鬱状態から抜けだし、平静

さにとりもどして以前の仕事に復帰する。鬱状態の『闇』が次第に『白くなる』理由は、正確には分からない。鬱状態がどん底に達したあとで起こる向上の兆しが認められるだけである。この転換点を告げるものが、清めの天の露や雨、あるいは涙にほかならない」²⁵。

5 第二の結合（図9・10）



9



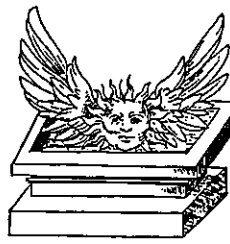
10

白色化された両性具有者に魂がホムンクルスの姿で戻り（図9）、両性具有者は蘇生する（図10）。これが第2の結合、月（銀）の再誕である。「心理学の観点からながめれば、錬金術において黒いものを銀の光を放つものに白色化することは、鬱状態を緩やかに再誕と新しい生の段階にかえることを象徴する。個性化過程において、30代から40代にかけて起こる中年の鬱状態というニグレドは、中年における銀色の再誕によって解消されるのである」²⁶。

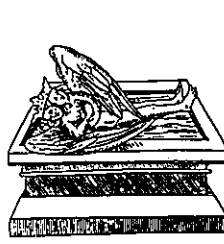
6 キトリニタス（図11～14）



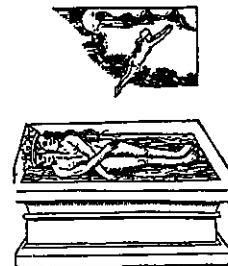
11



12



13

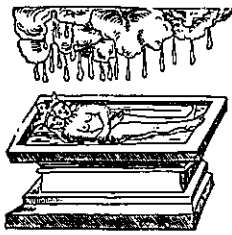


14

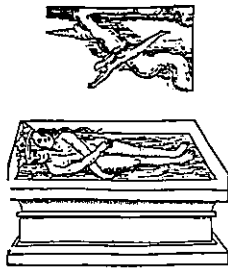
白の結合は究極目的ではない。さらなる目的は白い土を黄色に、月の状態から太陽の状態に、銀から金に変えることである。ここからキトリニタス（黄色化）が始まる。これは黄色の死と黄金の発酵と呼ばれる（図11～14）。これは個性化で言えば、中年後期に起こる過程である。「中年後期において、老い先短いことを自我が意識することには、自然の年齢や宇宙の広大にくらべて、人間の行為や野心が無意味であるという認識がともなう。

この有限と無限、人間と宇宙の対峙によって、中年の危機の引き金が引かれる。人生が難問になり、仕事が虚しいものになる」^{*27}。しかしファブリキウスは次のようにも述べている。「中年後期は憂鬱と絶望に悩まされるとはいえ、内なる光が強まって自己認識が深まる時期でもある」^{*28}。

7 第三の結合（図15～17）



15



16



17

両性具有者の体は清められ（図15）、魂と霊が天から帰還し（図16）、太陽の丘の上で復活する（図17）。これが第三の結合、太陽の再誕である。個性化の過程においては、第三の結合は中年後期における再誕を象徴する。ファブリキウスは「これは人生の普通の現象であって、創造力ある芸術家すべての伝記に見出されるだろう。」と言う^{*29}。そしてゲーテの『ファウスト』、ワーグナーの『マイスタージンガー』、ベートーヴェンの『第九交響曲』の喜びの歌などをその例にあげる。あるいはパール・バックが描写する次のような愛がこの段階に相当すると言う。「若いころにおぼえる愛や、中年で感じる愛ではなく、きわめて特別な価値ある愛、与えながら何も求めず、純金のみが戻ってくる愛」。そのような愛の段階にいる人は老賢者と呼ばれる。「夕日の輝き、あるいは老いていく人格は、自己をますます透明にさせ、内部から自我を照らし、個性化の花を開かせる。これが晴れやかな人格、老賢者である」^{*30}。

8 ルベド（図18）



18

太陽の結合は最終段階ではない。次にルベド、「赤」の死と腐敗という段階がある。それを象徴するのが図18である。「緑のライオンが黄金の両性具有者を苦しめることは、老年期という個性化過程の重要な段階を象徴している。回転する錬金術の作業が最後に近づくにつれ、生命の周期も最後に近づく」^{*31}。

9 第四の結合 (図19・20)



19



20

マリアの被昇天（図19）は月あるいは魂の上昇である。月あるいは魂は天に昇り、太陽あるいは霊と近親相姦の結婚をする。この昇華の究極の目標は哲学者の息子の完全な受胎であり、哲学者の息子はその成長した姿において、復活したキリストに等しい（図20）^{*32}。これは肉体の死と自己の復活を意味するとされる。ファブリキウスは死は決してすべてが無になることを意味しないとして、臨死体験の例を多数あげている。ある登山家が臨死体験から学んだことは次のことである。「いまの私は死がおそれるべきものではなく、人生のあっけない終わりでもなく、至高の体験であり、人生のクライマックスであることを知っている」^{*33}。

IV ユングとスウェーデンボルグの共通点

1 相応とシンボル

これまでスウェーデンボルグの相応による聖言解釈の実例とユングの考えを基礎においたファブリキウスの錬金術のシンボリックな解釈を見てきたが、これらの解釈の間の類似性は一見して明らかであろう。ここで共通点を整理してみよう。

まず第一にスウェーデンボルグの「相応」とユングの「シンボル」はよく似た概念であると言える。スウェーデンボルグは聖言は相応の言語によって書かれており、文字の意味

の背後に隠された内的意味があると言う。ユングは錬金術師がシンボルを使って語っているのであり、錬金術の図版には隠された心理学的意味があると言う。相応にせよシンボルにせよ、スウェーデンボルグとユングはいずれもそれらを用いて聖言あるいは錬金術の作業の表面の意味の背後に隠されたより深い意味を発掘しようとしているのである。

またスウェーデンボルグが、相応は太古の人々が共有していた知識であったが現在では失われてしまったと言っていること、ユングがシンボルを用いた表現の根拠にしている元型には太古的な性質があると彼自身述べていることを考えると³⁴、相応とシンボルは同じものを違った観点からとらえたものと言ってよいのではないかと思われる。

2 宗教と科学の総合

共通点の第二は、両者が宗教の問題に科学的にアプローチした科学者であったという点である。つまり彼らは宗教には深い関心を寄せたが、それは伝統的教会の信仰のあり方とはまったく異なるものであったということである。

スウェーデンボルグの場合、聖職者であった父は息子が神学を学ぶことを期待したが、彼の青年時代の関心は科学であり、デカルトこそ彼のヒーローであった。あらゆる科学を修めた後、靈魂の座を突き止めるという18世紀にポピュラーであったテーマに取り組むようになって、彼は自然科学の限界を痛感するようになった。そして深層心理の研究に進み、神秘体験を経て神学者になっている。その経緯からも彼の神学が独得であることがわかる。

スウェーデンボルグは人生の最後の20数年間に、30冊もの神学的著作を著したが、彼を神学者と呼ぶにせよ、彼の神学は伝統的なものとは全く異なっている。彼の場合、過去の学説を引用したり比較検討するということは一切ない。彼が残した膨大な靈的体験の記録からの引用、相応による聖言の一語一語の内的意味の発見、そしてその語の内的意味が他の文脈においても有効であるかどうかの聖言全体にわたっての検証作業、これらがスウェーデンボルグの神学を特徴づけるスタイルである。

これを「科学」と呼べるのだろうか。彼の靈的体験はユニークであり、それには長期にわたるヨーギの訓練に匹敵するような準備期間が必要だったのであり、誰もが経験するものではない。また相応による解釈についても特別のインスピレーションなしには誰もスウェーデンボルグのレベルに到達することはないであろう。その意味では、彼の観察した「事実」と「科学的方法」は特別のものである。しかしそのスタイルは彼が30数年間科学者として培ってきた、観察、発見、論理的推論という方法であって、科学と言うべきもの

であった。その科学性はとりわけ『天界の秘義』できわだっており、その膨大な分量のデータ、細部の緻密さ、全体を貫く論理的一貫性には驚かされるばかりである。また彼の神学著作には科学的事実に合致しないこと、不合理なことを神の名において強制するような内容は一切なく、旧約聖書の文字の意味における不合理性にも相応による解釈によって納得のいく合理性が与えられていることはすでに見たとおりである。

彼はヨーロッパ中で名声を博した科学者であったが、後にその科学的訓練は自らの宗教的使命のためであったと考えるようになる。彼は次のような興味深いヴィジョンを見ている。ある日、彼は壮麗な神殿を見る。形は正方形で、屋根は王冠に似ていて、側面には水晶でできた窓がずらりと並んでいる。入口は大理石でできており、その入口の上部には「今許される Nunc licet」と記されていた。これは「今信仰の秘義に知性的に入ることが許される」という意味であったというのである³⁵。このヴィジョンにおける「Nunc licet」こそスウェーデンボルグの神学の特徴である宗教と科学の融合を一言で表すことばと言えるであろう。このように、スウェーデンボルグは父親が期待した道とはまったく別の道を通して、最後に父親が願っていた目的地に到達することになった。スウェーデンボルグの伝記を著したドール、カーヴァン両氏はその著作を「神の啓示に導かれ、その技術者・政治家・行政官・科学者・神学者はついに科学と宗教は一つという地点を見いだしたのであった」ということばで結んでいる³⁶。

一方、ユングは神秘主義に深い関心を寄せ、あらゆる神秘主義を研究したという意味においては神秘主義者であったが、同時にその研究が科学であることを強く主張した人物でもあった。心霊現象や超心理的現象は迷信や詐術の類であり拒絶するというのが合理的な啓蒙主義の立場であり、現在でもそのような態度をとる科学者は多い。しかし現在の科学で説明できないことをことごとく排除していくなれば、健全な宗教でさえ幼稚で古くさい迷信とされてしまうであろう。そうすると私たちの精神生活はまことに貧しいものになってしまう。そのような態度をとるなら、ユングの指摘する「錬金術は、地表を支配しているキリスト教に対して、いわば地下水をなしている³⁷」という重要な錬金術の宗教心理的意味も見いだされることはなかったであろう。しかし神秘主義の重要性に気づいていたユングは、一見非合理的に見える現象も科学は取り上げるべきであるし、心のもたらす事実として取り上げることができると主張し、科学の領域を大きく拡大したのである。

ユングの宗教に対する態度は、牧師であった父の「考えちゃいけない。信ずるんだ」という助言を拒否したこと、「あなたは神を信じますか」という質問に「私は知っていま

す」と答えたことによく示されている。宗教の拒絶でもなく、盲目的信仰でもなく、心の中の事実として科学的に接近するという道である³⁸。それは科学の時代に衰退した宗教を、その時代にふさわしい方法で再生する道であったと言えるのではないだろうか。ユングにとっても宗教と科学は相反するものではなく、スウェーデンボルグと同様に相補うものであった。

3 再生と個性化

類似点の第三は両者の思想内容そのものの類似性である。ユングの解釈にしたがって錬金術を個性化過程ととらえると、個性化は作業の開始、最初の結合、黒色化、白色化、黄色化、赤色化、そして最後に死と復活という7の過程を経ることになる。これはスウェーデンボルグの解釈する天地創造の7日間によく似ている。果たしてこれらの7段階は厳密に対応するのだろうか、筆者には定かではない。もう少し大きくとらえた方がよいかもしれない。

ユングの解釈によると錬金術は精神の成長をめざすものであった。しかしその成長は直線的ではなく、ジグザグの過程をたどる。たとえば最初の結合の後には、黒色化という死と腐敗の過程があり、月の結合の後には黄色化の死と腐敗の過程があり、そして太陽の結合があるというように。本稿では錬金の作業過程を天地創造の物語の内容と比較してみたのであるが、ジグザグの過程を強調するなら、それを出エジプトの物語と比較してみるのも興味深いであろう。出エジプトの物語も人間精神の成長過程についてのたとえ話だからである。エジプトで奴隷であったイスラエルの民は神によって救出されるが、直ちに約束の地に導かれることはなかった。神は人々を食糧と水の少ない荒野に導いた。荒野で、人々は苦しい荒野の生活より、エジプトで奴隷の方がまだよかったとエジプトを出たことを嘆く。これは黒色化の過程に相当する。エジプトを出た後、彼らの生活は戦いの連続であった。しかしシナイ山で十戒を授けられるときがくる。これは真理を知るという意味で、月の結合にたとえられる。そしてついにはヨルダン川を渡って約束の地カナンに入る。これは太陽の結合と言えよう。この間、実に40年もの歳月がかかったとされている。すなわち人間は瞬時に善人に生まれ変わることはなく、長い過程が必要であるということである。人間の精神の成長過程は錬金作業による卑金属から金への変容のようでもあり、奴隷状態から荒野の試練を経て約束の地へ至る旅のようでもある。

これをより科学的な用語で語ればどうなるだろうか。スウェーデンボルグは、人間が生

まれ変わるには、まず「悔い改め」が必要だと述べている。そして「悔い改め」の次には「自己改革」がなければならない。「自己改革」とは次のような過程である。人間には善を受ける器として意志が、真理を受ける器として知性がある。知性は容易に高みに昇ることができるが意志はそうではない。人間は崇高な理想を聞くと、知性によってそれを容易に理解する。しかし理解したことを意志によって実行するというのはなかなか難しい。実行するにはそれに抵抗しようとする意志を強制しなければならない。このように、真理を理解した知性が低い状態にある意志をひっぱる過程、これがスウェーデンボルグが言う「自己改革」である。しかしそのような状態にも転機が訪れる。

「自己改革」が進み意志が引き上げられるようになると、ここに精神上の変化が起こると彼はいう。従来とは逆の過程、つまり高い状態にある意志が知性に働きかけるという過程が起こるのである。今度は意志が知性に先立つのである。そのことにより、人間は意志の愛にふさわしい考えをもつようになる。そうすると人間は自然的なものから霊的なものになり、新しい被造物になる。これをスウェーデンボルグは「再生」と呼んだ。このように「悔い改め」「自己改革」「再生」という過程を経て人間は生まれ変わるとスウェーデンボルグは言うのである。

このスウェーデンボルグの説明を錬金術にあてはめると、「悔い改め」「自己改革」「再生」は、それぞれ「黒の死と腐敗」「月（銀）の再誕」「太陽（金）の再誕」に対応すると言えるのではないだろうか。つまり絶望→真理→善という過程である。

以上、これまで述べてきたことを次のように要約することができよう。スウェーデンボルグは、靈感によって書かれたとされる聖言は古代人が相応のことばによって書いたものだと考え、古代人が聖言から汲み取った意味を科学的に明らかにしようとした。一方、ユングは、錬金術書は錬金術師がシンボルによって自らの内面の問題をあつかった文書であると見なして、これに科学的、心理学的にアプローチした。そして両者は、期せずして、それらの文書の中にほぼ同一の人間精神の成長過程を見いだすことになった。スウェーデンボルグにはユングにはない「神学」があるという点は大きな相違点であるが、人間精神の成長過程に関する両者の説明は類似しており、その内容は深遠ではあるが経験的に誰もが理解可能なものである。これは両者のアプローチが科学的であったことを裏づけるものと言えよう。

むすび

あまり読まれてないという意味でも、あらゆる領域で大きな影響を与えているが、そのことはあまり知られていないという意味でも、スウェーデンボルグは今なお隠された思想家と言えるであろう。その理由はいくつか考えられるが、スウェーデンボルグ研究者がしばしば指摘するのがカントの影響である^{*39}。スウェーデンボルグと同時代人であったカントは、霊能者としてヨーロッパ中で話題になっていたスウェーデンボルグに興味をもち、調査を行い『視霊者の夢』という小冊子を書いた。正確には『形而上学の夢によって解明された視霊者の夢』であり、このタイトルにはスウェーデンボルグの「夢」を論評しているカントの立場も確固たるものではなく「形而上学の夢」にすぎないという自嘲がこめられている。しかし、この本でカントは理性の人とは思えないほど何ら十分な根拠も示さずにスウェーデンボルグを非難、嘲笑しているのである。スウェーデンボルグの霊的体験を否定することはできないが、それを合理的に説明することもできないという状況に置かれて困惑するカントの様子がうかがえる本である。スウェーデンボルグの著作と彼の神秘体験に直面したことがきっかけで、カントは人間の理性の限界について考える必要を感じたのであり、その思索はやがて『純粹理性批判』に結実する。スウェーデンボルグの存在はカントにとってそのような大きな意味があったのであるが、『視霊者の夢』でカントがあまりにも激しくスウェーデンボルグを非難したために、カント以降、学問の世界ではスウェーデンボルグをまともに取り上げることはできないという雰囲気ができあがってしまった。スウェーデンボルグの評価としてはカントの『視霊者の夢』は不当であったというのが大方の見方であろう。

しかしそのようなカントについて、少し違った見方をしたのが若きユングであった。ユングはカントがスウェーデンボルグを取り上げたこと自体を評価し次のように述べている。「カントはスウェーデンボルグと接触するために、時間も努力も惜しみませんでした。可能な限り、彼はスウェーデンボルグの主張の妥当性を吟味し、その主張を丁寧に偏見なく読んでみました。このドイツの地に生まれた最も偉大な哲人と、たわいもない彼のエピソードたちの間には、何という違いがあることでしょうか」^{*40}。スウェーデンボルグに共感するユングは、カントはカント信奉者よりむしろスウェーデンボルグに近いのだと主張しているのである。林氏はこれはユングの「若気の勇み足」と評されている^{*41}が、スウェーデンボルグとユングの思想的な類似性を考えると、本音の部分ではユングのスウェーデンボルグ評はその後も変わっていないのではないかと思われる。ただしユングにとって、方法的

には心霊的な現象等を科学で扱うためのぎりぎりの限界が、それを心的イメージの事実とすることだったのであろう。両者の生きた時代が違うという事実から来る相違はあるが、スウェーデンボルグはユングの先駆者であったと言えるのではないかと思われる。

最後に、これまで検討してきたユングとスウェーデンボルグの思想の現代的意義を考えて本稿を締めくくることとしたい。近代科学は宗教の権威を低下させたが、これに対する宗教の側のリアクションの一つがファンダメンタリズムであった。しかしファンダメンタリズムは宗教を擁護する後ろ向きの対応であり、アメリカなどで強力な勢力を形成しているとしても限定的なものにとどまらざるをえないであろう。より多くの人びとが共感しているのは前向きの改革、すなわち分裂、対立を続ける「信仰」中心の宗教を洗練して普遍的なものに変えていく運動であると思われる。宗教学者の島藺進氏が「新霊性運動」と呼ぶ現象が現在世界中で起こっている^{*2}。「宗教」のイメージ低下で、「宗教」よりは「霊性」を、「救い」よりは「癒し」を重視する方向に転換しつつあるのが現代の精神状況である。そのようなグローバルに起こっている新霊性運動の中心テーマが「自己変容」であると言われている。そしてまさしく、スウェーデンボルグが聖言の中に、ユングが錬金術の中に見いだしたものこそ、この「自己変容」というテーマであった。その意味で現代はスウェーデンボルグやユングが注目を集める時代と言えるのである。

注

*1 林道義『ユング思想の神髄』朝日新聞社、1998、3ページ参照。

*2 このような見方は決して新しいものではないが、spiritual scientistという表現自体はあまり見た記憶がない。筆者がそのような表現に気付いたのはStephen Koke, *Hidden Millennium: The Doomsday Fallacy*, Swedenborg Foundation, 1998, p. 91においてであった。

*3 C・G・ユング『心理学と錬金術』I 池田紘一・鎌田道生訳、人文書院、1976、28ページ。

*4 J・S・バッハは1685年生まれ、スウェーデンボルグは1688年生まれであり、両者はまったくの同時代人であった。またA・ハレングレンは次のように述べている。「彼（バッハ）は音楽がロココ風のモノフォニックでギャラントなスタイルに道を譲ろうとしていたときに、バロックのポリフォニーとりわけフーガを完成に導いたのであった。同様にスウェーデンボルグもその形而上学、詩学、スタイル、ヴィジョンにおい

てバロックにとどまり、彼なりのやり方でその時代の最後の頂点をきわめたのであった」。Anders Hallengren, *Gallery of Mirrors: Reflections of Swedenborgian Thought*, Swedenborg Foundation, 1998, p. 6.

- *5 ロビン・ラーセン編『エマヌエル・スウェーデンボルグ：持続するヴィジョン』高橋和夫訳、春秋社、1992の中のインゲ・イヨンソン「世界の新エルサレム」の中に詳しい説明がある。
- *6 E・スウェーデンボルグ『黙示録講解』1080。なおスウェーデンボルグの著作からの引用は、慣例にしたがってページ数ではなく彼がつけた小節の数による。
- *7 R・W・エマソン『エマソン選集1 自然について』斎藤光訳、日本教文社、1960、79ページ参照。
- *8 *Animal Kingdom*、1843、293（u）の中で「物質世界は霊的世界の象徴にすぎない」という考えを提示している。
- *9 スウェーデンボルグは聖書の中のすべての文書が神のことばでないと言う。相応によって書かれたもの、つまり内的意味を含んだもののみを聖言としている。『天界の秘義』10325参照。
- *10 『天界の秘義』3296
- *11 その実例の一つがナチズムであった。ドイツ人によるキリスト教の受容、20世紀初頭の退廃ムードが、ドイツ人の無意識の中の暴力性と秩序志向を増幅し、それがナチズムにつながったというユングのナチズム解釈には説得力がある。C・G・ユング『現在と未来 ユングの文明論』松代洋一編訳、平凡社、1996参照。
- *12 C・G・ユング『個性化とマンダラ』林道義訳、みすず書房、1991、49ページ。
- *13 同上、66ページ。
- *14 同上、68ページ。
- *15 同上
- *16 C・G・ユング『元型論』林道義訳、紀伊国屋書店、1999、22ページ。
- *17 同上、23ページ。
- *18 C・G・ユング『転移の心理学』林道義・磯上恵子訳、みすず書房、1994、p.277。
- *19 ヨハンネス・ファブリキウス『錬金術の世界』大瀧啓裕訳、1995。
- *20 同上、637・638ページから転載。
- *21 ファブリキウス、前掲、628ページ。

- *22 同上、629ページ。
- *23 同上、257・258ページ。
- *24 同上、287ページ。
- *25 同上、306ページ。
- *26 同上、352ページ。
- *27 同上、404ページ。
- *28 同上。
- *29 同上、456ページ。
- *30 同上。
- *31 同上、462ページ。
- *32 同上、465ページ。
- *33 同上、518ページ。
- *34 前掲、ユング『元型論』29ページ。
- *35 スウェーデンボルグ『真のキリスト教』508。
- *36 Geroge F. Dole & Robert H. Kirven, *A Scientist Explores Spirit*, Swedenborg Foundation, 1997, p. 64.
- *37 前掲、ユング『心理学と錬金術』Ⅰ、40ページ。
- *38 河合隼雄『河合隼雄著作集11 宗教と科学』岩波書店、1994年、70ページ。
- *39 Robert H. Kirven, Swedenborg and Kant Revisited: The Long Shadow of Kant's Attack and a New Response, in Erland J. Brock et al. eds., *Swedenborg And His Influence*, The Academy of the New Church, 1988参照。
- *40 林道義『ユング思想の神髄』朝日新聞社、1998、168ページ。
- *41 同上
- *42 島蘭進『精神世界のゆくえ：現代世界と新霊性運動』東京堂出版、1996年、46ページ。